

# 韓国の学歴社会と男尊女卑思想

～農村女性の識字問題を中心に～

李 恩 珠

はじめに、

本稿は、韓国社会における学歴社会と男尊女卑思想の関係を歴史的に探り、それが韓国女性の生活に及ぼす影響についてまとめたものである。特に農村女性における非識字問題が彼らの社会生活や文化にどのような影響を及ぼしているのかに焦点を当てている。

経済的に急激な発展を遂げてきた韓国社会において、経済的な貧困層は減りつつあるとはいえ、それに相応するような生活の質に関わる問題は、都市と農村、または地域によってその格差が大きい。

こうした格差が生活社会や文化に生じる要因は、韓国社会の学歴信仰にあるだろう。歴史的に形成されてきた韓国社会の学歴への強い信仰は、学校歴の有無によって、生活のありかたを規定し、結果的に大きな格差を生み出す。とくに職業に対する貴賤の意識がいまだ強く残る韓国にあっては、その傾向は顕著である。

非識字者である一部の農村女性の場合、状況はさらに厳しいものとなる。彼女たちには、学歴社会の弊害に加えて、男尊女卑思想の二重の抑圧がかかっており、社会活動、老年期における文化においても大きな影響を与えている。こうした農村地域の非識字にある女性たちに内在する問題は、彼女たち個人の責任でも、過去の問題でもなく、現在の韓国が抱える問題としてとらえる必要があるだろう。すなわち、学歴社会の風潮と男尊女卑の思想の関連のなかで、これらの女性たちのいわゆる「苦勞」や「恨」が生まれたと理解できるのである。

そこで筆者は農村女性の生活の質における問題を、学歴及び社会への参加、男女差別の問題などにわけて、それらの関連とその現状について調査した。ソウルの近辺である陽平郡龍門面花田里で行われた今回の調査は、農閑期である冬季期間における農村女性及び男性の生活に密着し、韓国農村地域の非識字問題と男女差別問題、そして社会への参加及び遊び文化の不在に焦点を当てている。本稿の構成は、1. 歴史からみた学歴社会の背景、2. 学びの場から疎外された女性の生活とその現状、3. 韓国農村女性の非識字問題の現状報告、4. 現地調査結果、を述べることとする。

## 1. 学歴社会の歴史的な背景

曹ヘジョン (2008) は、「単に性の相違から違う役割をもち、違う社会的な位置を占有する社会的な生活構造を、そしてその中で相互違う思考、夢、挫折、不安を持って生きる姿を生活次元の視点

から分析する必要がある」と強調し、女性解放運動は、女性に限る運動ではなく、その社会が持つ根本的な矛盾を解決するための動きであり、抑圧者と被抑圧者の両側における解放につながると述べる<sup>(2)</sup>。また、金ソングジュは、「よく韓国女性は気が強いと言われる。それは学べず、自由のない生活が続いたためである。人間は抑圧の状態が続くと原初的な攻撃性だけが表れる」と述べる<sup>(3)</sup>。こうした問題は、韓国社会においては、女性に限らず、男性にも当てはまる言葉である。徴兵制をもつ韓国の場合、除隊後の男性は鍛えられ強くなるとはいえ、単純かつ抑圧的な生活の中で‘乱暴’と間違われるような‘男らしさ’を強いられることが日常化されている。

つまり韓国社会には構造的に常に抑圧者と被抑圧者が存在しているといえる。女性は常に男性をはじめとした男性優位社会に抑圧され、男性は軍隊生活及び縦割り社会の上下関係における被抑圧者であろう。これらの意味からも、女性解放運動というのは、韓国社会全体における全ての人間においての人権解放運動につながるといって過言ではない。

上記から見ても、韓国社会における男女差別や格差の問題は歴史的に積み重ねてきた弊害であるということが推測できる。

### 1-1 学歴社会の歴史的な背景

韓国における私教育問題は長い歴史的な背景を持ち、朝鮮時代初期（14世紀ごろ）より指摘されている。『世宗実録』によると「科挙試験に出そうな問題は全て書き写し暗記をした、そして熱心に文字を読む人は周りから蔑視された」と記されている。また、現在韓国社会において大きな問題となっている「チマパラム（スカートの風の意）<sup>(4)</sup>」、すなわち母親が子どもの出世のために努力を惜しまないという現象も同時期におこっている。朝鮮時代における母の権力とは、長男を出世させることから始まるのであった。こうした「官」とつながりを持つことに意味を見出す社会的風潮から、「売管売職」と「入試不正」の歴史が始まったのである。

実際、1690年大邱地域のヤンバンの数は全体の9.2%に過ぎなかったが、1783年には37.5%、そして1858年には70.3%、朝鮮末期には80～90%と増えている。康俊晩は、イギリスの旅行家であるIsabella Bishop（1831～1904）の発言を引用し、当時のヤンバン社会の腐敗を裏付けている。1894年から1897年まで四回にわたって朝鮮を訪問したビショップは、「改革にもかかわらず韓国にはいまだに二階層だけが存在し、それは略奪者と被略奪者の構成である」、「免許ももらった吸血鬼であるヤンバン階級から絶えなく増える官僚階級、そして人口の4/5を示す、下層民である平民階級がそれである。後者の存在理由はただ、吸血鬼に血を供給するだけだ」とその怒りを記したのだった<sup>(6)</sup>。

ヤンバン社会の腐敗が深刻になればなるほど平民のヤンバンへの憤りは、「ハン」となり、それはまた「憧れ」となっていった。それゆえに、官僚になるために、誰もが手段を選ばず、まさに必死の思いで取り組んだのであろう。

このように、昨今の韓国社会における上位階級の道徳性のかけた腐敗は朝鮮時代のヤンバン制度から始まったのであり、歴史的な背景を持っている。そして‘支配する側’に立とうとする韓国民の欲

望は現在まで続いている。それを象徴しているのが「キログアッパ（ガンパ）」<sup>(7)</sup>のブームである。早期留学のために離れ離れになっている家族を意味する「キログアッパ」は、年々増加の傾向にあり、2004年から2008年までの四年間で5万家族に及ぶという統計結果が出されている<sup>(8)</sup>。この現象について、「ワシントンポスト誌（2005/1/19）」には、「苦痛な選択」というタイトルで以下のように、韓国の‘キログパパシンドローム’について詳細に述べている。「韓国内のキログパパは自殺，うつ，肥満に苛まれており，アメリカにいる子ども達は留學生活に適應できず，攻撃的になる末，薬物に手を出すなどといった副作用が続出している。“韓国はIT産業を初めとする先進国とは言え，社会は未だに王朝時代の教育体制が基盤となっている”“職業と社会的な地位，そして結婚までもが成績により左右され，創造性と精進的な教育は成り立たない”」<sup>(9)</sup>。

## 1-2 ‘出世’という概念の誕生

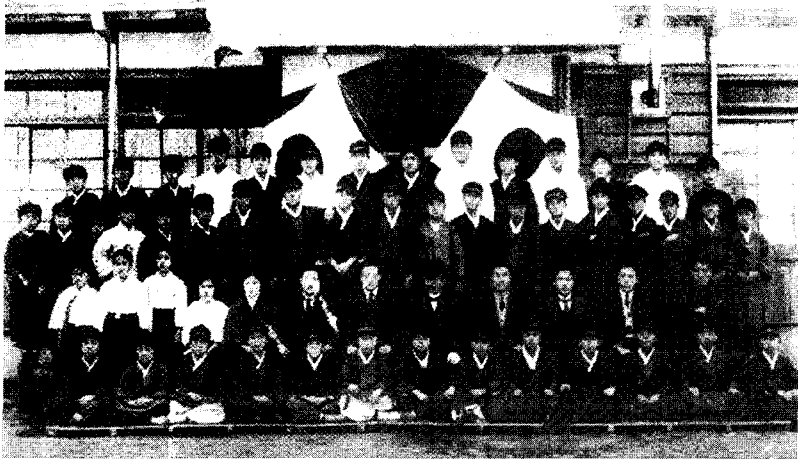
植民地下における‘土地調査事業’は朝鮮農民において書類と文字の必要性を悟らせた一番大きなきっかけとなった。文字が分からず自分の土地を奪われた一部の農民らは、「わが子だけは絶対に教育をさせる」という教育熱から「牛骨塔」<sup>(10)</sup>という神話まで作られる<sup>(11)</sup>。当時文字が読めるエリートは親日活動に関わることで出世の機会が多く与えられ，結果的に豊かな生活をおくることができた。「立身揚名」とは‘出世し世に名をあげる’という意味で，国を持つものしかにできない。したがって植民地下にあった朝鮮人は「揚名」ではなく，日帝下における「出世」という概念だけが必要とされ，残された<sup>(12)</sup>。「勉強しないものは土ばかり掘って食うしかない」という俗説が，この時期には現実となっていったのだった<sup>(13)</sup>。1920年代に普通学校（1941年に国民学校に改名）が増設されるが，そこでの入試は面接が中心で，金があるかどうかと聞かれた始末であった。「有錢入学，無錢落第」という流行語ができるほど金がないものは教育に恵まれなかった。以下は，1920年代に少年誌に載せられた落第生の言葉である。「どうすれば僕も学校にいけることができるのか，どうすれば。。。」。当時，差別される朝鮮人にとって，社会的な出世の手段である教育に対する欲望は，親日か反日の価値からは問えないものになっていた<sup>(14)</sup>。つまり当時の朝鮮人にとって教育とは，食べていくための必須条件であり，その理念まで問えない切実な欲望となっていたと言える。

## 2. 韓国社会における男尊女卑思想

### 2-1. 学びから疎外される韓国女性

女性において，普通学校への入学競争はより激しいものであった。その上，「新女性誌（1924年5月号）」では，女性教育を「玉の輿にのるための手段」と非難し，「生殖器を売り」食っていく「精気売淫」であるという表現まで用いて非難している<sup>(15)</sup>。また，1935年「学等」の「女子教育の再考察」において李マンソクは，「嫁ぐ条件として学問を学ぶ女の思想はそもそも人形であり寄生虫である自己蔑視のガメンを取る日はなし」と述べた。

[写真-I] は，1928年度大邱市にある小学校の卒業写真である。前列にチマジョゴリを着た女子



【写真一 I】 1928 年度大邱市玄風小学校の卒業生 (資料)「玄風小学校の百年史」から抜粋

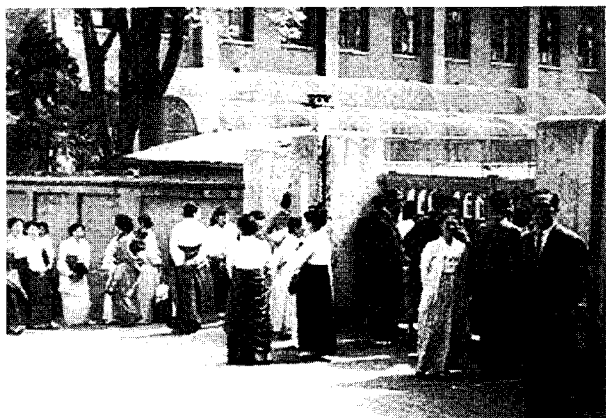
生徒が目立つ。

韓国社会は「各個躍進社会」<sup>(16)</sup>であり、韓国教育は「各個躍進教育」である。韓国に度々起きる集団的な熱狂と憤怒の秘密もそこにある。集団的な熱狂と憤怒は各個躍進から疲れた心身を癒すための集団祝祭である。韓国の各個躍進文化には明暗があり、それは世界的に急激な発展を成し遂げた原動力であると同時に、全ての問題を個人と家族段階で解決しなければならないという生活であり、それはあまりにも過酷であり殺伐とした光景である<sup>(17)</sup>。

開放の間もなく朝鮮戦争が勃発する。戦中にも大学生は徴集から免れる反面、学校に通わない、主に農民の息子は徴集されていった。つまり戦中における学歴は徴集の回避手段となっていたのである。

戦後、「戦争未亡人の墮落を防ぐ」という扇動により韓国女性には「強い母」を強いられていた。しかしそれは女性中心的なものではなかった。「母中心社会において一番大切な家族関係は母子関係であり、夫の不在中、家計を継ぐ長男を出世させ、嫁いだ家紋を復興させる義務的なものであった」。つまりオモニの生活力は、父系血統中心の男性優越主義の再生産に投資されたのである<sup>(18)</sup>。またその犠牲はオモニに限らなく、娘、特に長女にも及んだのである。韓国において長女は、生存戦略の代表的な手段であった。それは現在まで農村を中心に当然とされている。過去の韓国ドラマには、長女が家事を出伝うか、工場で働き、兄弟を大学までやるというストーリーはまれではない。また、現在、著者が非常勤として勤める大学(ソウル市明知短期大)の平生教育コースには、中年から高齢期の女性受講生が後を絶たない。彼女達の話では学びの機会を失った理由として、「女は学ぶと生意気になると言われ反対されたから」、「兄弟の面倒をみるため(大学へやったため)」「こどもの育児におわれて」等をげている。

家族の利益を強調された社会的な風潮は、家族利己主義をより発展させた。その結果、韓国の母達



【写真一Ⅱ】1950年代、中学入試場前の母達  
（資料）康俊晩著『入試戦争残酷史』P89



【写真一Ⅲ】2008年度大学入試場で祈る母  
（資料）oh my ニュース (<http://media.daum.net/culture/others/view.html>)

は家族利己主義を近代的に変形させた張本人となってしまった。つまり母は強くなったが女性は強くならなかったのである。

## 2-2. ゴンドリ（工場で働く男性）とゴンスニ（工場で働く女性）

韓国社会の学歴社会と女性差別を端的に表現した言葉が「ゴンスニ」である。「ゴン」は「工」の音読みであり、「スニ」は女子の名前の定番「～子」に当てはまるといえる。同じく「ドリ」は日本の「～郎」に当てはまる男子の名の定番である。これは、工場で働く人を蔑視する呼び方である。1970年代にソウルの大学生一部が、同年代の人が工場で労働していることに対する蔑視した表現から流行った言葉である。特に賃金が男性の40%に過ぎなかった女性の対する差別は最もひどかった。1970年代における彼女らの労働は、現在の韓国社会の原動力といっても過言ではない。しかし農村を離れ社会に進出した彼女たちの向上心に対して、こうした言葉の暴力が浴びせかけられた。当時上京した彼女らの学歴は、小学校以下が60%であり、全体的女子生徒の高校進学率は24%に過ぎなかったという<sup>(19)</sup>。その時期から韓国には‘夜学’がはやるようになった。労働者は、仕事後にボランティアの大学生を中心として開設された夜間学校で学び、学歴検定試験を受け、「ハン」の学歴を手に入れることになるのであった。

家族からも学校からも、また社会生活においても韓国女性は差別をされていた。しかし、韓国女性は差別されればされるほど「わが子だけには差別を後継がせない」という執念が強く働くことになったのではなからうか。それが昨今の「チマパラム」「入試疑獄」と象徴されるような韓国を作り出したと言えよう。

現在の専業主婦の一部は、集まりを結成して情報を交換し、子どもによりよい大学にいかせるため

に自分の私生活を諦める傾向にある。そして、働く母とその子どもを除け者にしてしまう異様な風景はまれではない<sup>(20)</sup>。また、彼らの子ども達は「ママの目標達成に向かって頑張ります」という手紙を書く始末である<sup>(21)</sup>。現在、高学歴を持つ都市の母達も、そして学べなかった「ハン」をもつ農村女性においても、専業主婦を中心に子どもへの投資に全てをかけているのが現実なのである。

### 2-3. 農村女性

冒頭にも述べたように韓国における識字率は先進国の中でも高く評価されているが、そもそもその識字調査方法について矛盾がある。韓国農村のハルモニ（おばあさん）達の多くは自分のことを‘カマクヌン’<sup>(22)</sup>と表現している。‘カマク’は‘真っ暗’の意であり、‘ヌン’は‘目’の意である。‘くらい目’とは韓国では、‘見えない’つまり、‘まったく読めない人’を指している。しかし韓国における識字調査対象にハルモニ達は一人も含まれていないことが問題である。

そこで著者は、京畿道陽平郡龍門面花田里における農村女性の識字問題とその生活についてインタビューと面談式の調査を行った。当里は総85戸、107世帯として総人口約162人と構成される小さな町である。里長の家に訪問した際、60代の女性が行政から届いた書類を里長に出し、内容を教えてほしいと言っていたのが印象に残る。数年前に夫を亡くした彼女は手紙が届くたびに里長に訪ね、読んでもらっているという。彼女以外にも一人暮らしをしているほとんどの女性は里長から書類を解釈してもらっているという。不便としか言えない彼らの生活の現状を以下のようにまとめる。

## 3. 調査の結果

### 3-1. 里民の年齢及び学歴の構成

里民の中で高卒以上の学歴を持つ人は、田園住宅に住んでいるソウルから移住して来た人々8人、中卒が11人、小卒が32人、無学で読み解きができる人が80人以上、無学で読み解きができない人が22人という驚く結果であった。年齢は、30代から90代まで幅が広いが、全体の80%が65～95才の高齢者で構成されており、この年代はほとんど無学者であることが分かった<sup>(23)</sup>。この町はソウルの近辺であることから、韓国における被差別地域である全羅道、江源道、済州道等の農村に比べると、経済的に豊かで若者が多く在住している。したがって、他の農村はこの町よりさらに低い識字率である可能性が高く、それが韓国農村の現状であるといえよう。

### 3-2. 農閑期における生活

〔写真-Ⅳ〕と〔写真-Ⅴ〕は、2009年03月21日に撮った、町の会館の全景と花札をしている里民の風景である。花札は十ウォン玉が飛び交わす賭けことである。普段は多ければ20人から50人まで集まり、昼食と夕食まで一緒に作って食べるのが日常化されているという。この風景はこの町だけではなく、韓国の農閑期農村の一般的な風景であると捉えても過言ではない<sup>(24)</sup>。

ハルモニ達とのインタビューの中で口癖のように出る言葉は「わたしは、カマクヌンだけど、子ど

もは皆ちゃんと学んでいる」とか「私が文字さえ読めればこのような農村には住まん」、「私が学んでいればな、ハイカラーになって親孝行しただろに」等と発言であり、笑いも涙も、憤りも飛び交われた。市内には社会教育プログラムも開設されており、「老人大学」などが実施されていた。それらに参加しない理由については、「いまさら学ぶって恥ずかしい」「生活の不便を感じない」「体力が持たない」「勇気が出ない」等を挙げている。花札をしている理由について聞くと、「やることがない」「家にいても退屈だから」「認知症にかからないため」などと挙げていた。計算ができない高齢者のためには、若い人が計算を担当しているという。彼女たちはインスタントコーヒーを何杯ものみながら、またインスタントラーメンを間食としてとりながら花札に夢中になっていた。ソウルの公園でウォーキングをしたり囲碁等をしている高齢者達とはまた違う風景であった。一部の人はアルコール依存症にかかっており、トラブルの元であるという。

学歴と関係なく彼らは、都市の貧困層より精神的な面では恵まれていた。「ソウルではご飯も食べられない人もいってね、こちらはこう遊んでも米を作られるから飢えないんだよ」といい、笑うホルモンもいる。「死んだかどうか毎日集まると確認ができるから互いに安心できるさ」という人もいた。とはいえ、毎日のようにトラブルが起こり、喧嘩の絶えない日々だという。

彼らは自分なりにその生活満足しているといえ、彼らに社会参加の機会は、里長の業務と若い人の宗教活動にすぎないという。しかし社会への参加は無学の不便さを悟る機会となり、それはまた学びへの欲望になり、そこから学びの必要性和喜びを感じ始めるのではなからうか。波乱な歴史の中で犠牲されてきた彼女らにおいて学ぶ機会を与えることこそが、一番の報いであろう。彼らの犠牲により学べたその子息は、それ以上の苦痛を与えたくないため親に学びことを強要することに躊躇してきたかもしれない。そして子息の学歴と社会活動は親のプライドとなり出世した子を持つ親は町でリーダー的な存在であり声が高い方であると言う。「暇つぶし」のために毎日集まり花札に夢中になることも一つの楽しみではあろうが、学びの喜びを感じたことのない彼らには学問への動機付けが見つからない。



【写真－Ⅳ】花田理の住民会館の全景



【写真－Ⅴ】花札をしている人々

また、男女差別の問題も深刻であることが分かった。町の会議への参加は男性のみであり、掃除の日は女性のみ参加しているという。「婦人会」という女性の集まりとは、掃除、料理などに限られた活動であるという。「男らは、飲み会などに集まって自分らだけが旅行に出かけたりしている、女はいつまで台所にばかりにいる」といい、悔やむハルモニもいる。

## まとめ

以上のように、韓国社会における教育とは、植民地化と戦争の経験のもと、道徳性を喪失し、生き延びるための手段としての意味合いを持つ。そして学歴社会の中で、女性は、学べない「ハン」を「男女不平等」を再生産する主体としての役割を果たさざるを得なかった。特に無学であるがために社会進出の機会と家族の中で主導権を奪われてきた農村女性の場合、学びの喜びすら感じられず、「被抑圧者」として、その生活の質にも大きな問題を抱えている。そしてその理由を、すべて「学べなかったから仕方がない」といい、自分に帰結していることを看過してはいけぬ。

波乱な歴史の中で生きてきた韓国人、特に女性らの生における「ハン（恨）」（特に学べなかったハン）は過去の問題ではなく、現在においても農村女性の中に「鬱憤」となっていた。それは男性の戦争、出稼ぎなどからの留守中、家族を養ってきたハルモニ、オモニ達の苦難な生活から積まれてきたものであろう。その鬱憤は子どもに対して異常まで教育熱心になるなど、現在の韓国社会の教育にも大きく影響を及ぼしている。子どもの出世を親のプライドに賭け、わが子を所有物として捉え、「一流」ばかり押し付けているのである。

「ソウル大に通う娘を持つ親と呼ばれたい」「何で君なんか生んでこんなに気をもんでいるのか分からない」「○○の爪でも煎じて飲みなさい」このような言葉の暴力は親子の関係を超えて、

‘親—学生—教師—学校—言論’が一丸となって広げる共同ゲームとなっている<sup>(25)</sup>。子ども達は「人を抜いて支配する人になる」ことを使命として、親の欲望に応じるため必死になっているのだ。

趙ヘジョンは、「韓国の親は‘大学校’という‘新興宗教’の狂信者として‘子どもの人間的な成長の支援者ではなく、競争支援者’としての役割のみ果たしている」と嘆く<sup>(26)</sup>。それは都市と農村を問わず、全ての親と既成世代に対する指摘であろう。大人は次世代によりよい社会を継がす義務がると考える。いつの間にか韓国社会は、被害妄想に陥り、その‘八つ当たり’を子どもにしているかのように見える。

また、韓国農村女性の場合、「各個躍進」の文化の中で、兄弟、家族、国のために、その生を犠牲し、自国だから「読めなくても生きられる」という暗黙の強要の中で学びと社会参加の機会を奪われてきたのではなからうか。歴史的な証人である彼女らに自分らを省察する機会を与えるべきであり、この機会の創出は文字の読み書きから始まるのであろう。

注(1) 国立国語院における‘非識字率調査’の方法は成人4,500名と小学生1,700名を対象とした読解の調査であり、文字を読めない人々は対象とされていない可能性が高い。2008年38年ぶりに‘非識字率調査’を打ち出



- したといい、1970年度、7%と統計された後、5%を下回った調査結果により、必要性がなくなりその調査は行われていない ([http://www.korean.go.kr/08\\_new/index.jsp](http://www.korean.go.kr/08_new/index.jsp))。
- 解放直後の韓国社会における文盲率は90%、しかし60年が過ぎた現在の文盲率は0に近い（韓国中央大兼任教授陳重權 [mkyoko@chollian.net](mailto:mkyoko@chollian.net)）。
- (2) 曹ヘジョン『韓国の女性と男性』文学と知性社、2008 P3-5
  - (3) 韓国育児放送‘金ソングジュ心理学者に聞く’2009/01/30放送分 (<http://www.ugatv.net/>)
  - (4) 女性の大きな活動の意味しているが、現在の韓国社会では、親御がわが子の教育（特に入試）のためにあらゆる方法を使う意味合いを持っている。学校関係者等への賄賂・寄付金問題が多い。
  - (5) 金デホ「韓国社会に対する新しい洞察と模索」シンポジウム‘韓国社会を再びデザインする’2008/07/12。
  - (6) 康俊晩著『入試戦争残酷史』人物と思想史、2009、P26
  - (7) ‘キログ’は渡り鳥の‘ガン’の意で、韓国社会では早期留学がブームになり、父は国内で資金を仕送り、母はアメリカ、カナダなどに子どもと留学に同伴している。離れ離れになり子どもの教育に投資している家族を支援している父を指す。
  - (8) 韓国日報2004/10/21
  - (9) (6)と同上、2009 P243
  - (10) 貧しい農家で、‘牛を売って払った授業料で建てられた建物’という意味として‘大学’を俗語として表現した言葉。
  - (11) (6)と同上、P34
  - (12) 崔ボンヨン『韓国文化の性格』四季、1997、P222
  - (13) 漢ウヒ『植民地前期の普通学校』教育科学社、1998
  - (14) 柳ソフン「植民地下の朝鮮は‘欲望の植民地’」東亞日報、2006/11/14
  - (15) 金ミジ『だれがハイカラーの女性と暮らすもんか：女学生との恋愛』サルリム、2005、P81
  - (16) 各個躍進＝各個撃破；‘敵がその全勢力を合一しない機に乗じて、そのおのおのを各個に打ち破ること（広辞苑）’の意味で韓国社会では、社会的・国家的な危機及び問題について各個個人が解決しなければならない社会である意味合いで使われる。
  - (17) (6)と同上、P60
  - (18) 允テリム『韓国の母性』知識マダン、2005、P50
  - (19) (6)と同上 P137
  - (20) (6)と同上、P228
  - (21) 母が留守中、勉強せずゲームばかりやっていた小学生三年の男の子が、母に叱られた後、反省文として書いた手紙の内容（KBS放送「私の家庭教育どうですか」2009/04/02の放送分）。
  - (22) 文字が読めない無知な人の目、または、その人。  
国語辞典 (<http://krdic.daum.net/dickr/contents.do>)
  - (23) 里長の金鐘元さんとのインタビューによる。
  - (24) 実際このような風景はマスコミから多く報道されている。
  - (25) 李「親の利己主義が教育を減ぼす」京卿新聞（1994/3/29）
  - (26) (9)と同上、P245